誰もがきちんとした場所で暮らせる世界を

神戸外大 Habitat／戸高　朱里（国際関係学科・学生）

はじめに

神戸市外国語大学にある海外ボランティアのサークル「神戸外大ハビタット」は、国際 NGO 団体“Habitat for Humanity Japan”の学生支部です。

この国際 NGO 団体ハビタット・フォー・ヒューマニティは、1976 年にアメリカのジョージア州で、貧困により劣悪な住環境に暮らす家族に住宅支援を開始したところからスタートしました。健全で豊かな生活を営むための基盤には、安心して暮らせる住まいが必要だと考え、家の建設支援や、衛生設備の設置支援、災害に強いコミュニティづくりなど、「誰もがきちんとした場所で暮らせる世界」の実現に向け、現在では世界70か国以上で住まいの問題に取り組んでいます。

私たちの活動について

Habitat for Humanity Japanの学生支部として、海外ボランティアはもちろん、国内でも、大学生である“私たちにできること”を日々模索しながらボランティア等を行っています。主な活動としては、①海外建築ボランティア（GV：Global Village）、②国内ボランティア、③通常ミーティング、④JCC活動（他大学にあるハビタット学生支部との繋がり）があります（図1）。

図1：ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパン

海外建築ボランティア（GV）について

ハビタット・フォー・ヒューマニティのメイン活動であるGV（Global Village）とは、ハビタットのミッションである「手を取り合い、家、コミュニティそして未来を築く」を目指し、家の建築や修繕を通じて、家族が適切な生活環境を手に入れることを指しています。

住居建築支援は、私たちが住んでいる日本ではあまり聞き馴染みのない言葉かもしれません。しかし、今日では世界人口の約 8 人に 1 人、数にして 10 億人もの人が不適切な住環境、若しくは家の無い状態にあると言われていますので、まさに世界中で必要とされている取組みなのです。東南アジアなどでも、一部の地域では都市化が進む一方で、インフラの整備が追い付かず、不適切な住環境に身を置かざるを得ない地域も沢山あります。それらは住環境だけではなく、所得格差の拡大や、環境汚染など様々な問題と密接に関わっています（写真1）。

写真1：安心して暮らすことができない住環境
（ハビタット・フォー・ヒューマニティ）

コロナ禍を経て

そんな私たちの活動も、コロナにより、思うように、渡航・実施ができない状態が続きました。そしてようやく2023年3月、制限はありつつもコロナ明け初めての渡航が実現しました（写真2）。

写真2：コロナ明け初めてのGV（神戸外大ハビタット）

渡航先は、ベトナムのドンタップ省という、自然豊かでゆったりとした空気が流れる田舎町です。

私たちが訪れた支援先（ホームパートナーさん）は、家はあり

ますが、外壁が無い状態でした。外壁が無いため、雨が降ると家の中まで水浸しになってしまいます。そこで、その外壁を創るお手伝いをしました。

まずはセメントを創る作業から始まり、レンガを積み上げ、毎日炎天下の中、かなりの重労働ではありましたが、日を重ねるごとにだんだんと積みあがっていくレンガから、達成感を感じることができました。

ホームパートナーさんに笑顔も見られず、こちらも積極的にお話しすることもできず、正直このまま一緒に活動できるのか不安に感じた初日。現地の方々はベトナム語なので、身振り手振り教えてもらい、私たちも英語の通訳さんに助けられながらジェスチャーで伝え、理解しようと一生懸命になりました。伝えたいけど上手く伝えられないとモヤモヤした気持ちになるときもありましたが、徐々にホームパートナーさんにも笑顔が増え、「またね」と覚えたての日本語で毎日お見送りしてくれるようになり、距離が縮まっていくのを肌で感じることができました。そして迎えた最終日、ホームパートナーさんが涙してくださいました。笑顔が無かった初日からは想像もつかないことでした。短い時間ではあったけれど、共通言語はなかったけれど、表情や向き合う姿勢で気持ちって伝えられるのだ、と感じた瞬間でした。

現地の大工さんや、ハビタットの方、ホームパートナーさんたちと一緒に汗を流しながら活動できたことは、私たちにとってかけがえのない時間、思い出となりました。そして何よりも実感したことはボランティアへの意識の変化です。

派遣の前は、「自分以外の誰かの為に頑張る」「ボランティアをしに行く」という心持ちでした。しかし、いざ現地に行くと、はじめましての私たちのことを温かく迎え入れてくださり、全く建築の知識もない私たちに身振り手振りで教えてくださったり、お庭になっているフルーツを沢山いただいたり…。この派遣期間の中で、ボランティアをしに行った側である私たちの方が受け取ったもの、学ぶことが多かったことに気づき、感謝の気持ちでいっぱいになりました。だからこそ自分たちの想いが伝わっていたと実感できたことが嬉しかったです（写真3）。

写真3：外壁創りの様子（神戸外大ハビタット）

国内ボランティアについて

海外ボランティアだけではなく、日頃から私たちにできることを、ということで、東日本大震災のボランティアや、清掃のボランティア等、国内ボランティアも行っています。

今年の夏には、須磨海岸でのビーチクリーンや心斎橋での清掃ボランティアを初めて行いました。ビーチクリーンでは、想像していた以上にプラスチックごみや大きなゴミまで捨てられていたのを目の当たりにしました。外大ということもあって海外に目を向けがちでしたが、もっと身近なところを見渡してみることも大事なのだと気づかされました（写真4）。

写真4：須磨海岸でのビーチクリーン（神戸外大ハビタット）

そしてこの SDGs 月間では、「マイボトルウィーク」を実施しました。プラスチックごみ削減のため、ポスターや Instagram を使って、マイボトル持参の啓発活動を行いました。

この企画を実施するにあたって、どうしたら大学生にも取り組んでもらいやすいのかをメンバーで考えました。「環境にやさしい」＝「コストがかかる」という印象があると思います。それではいくら環境に良いと言われても実現するにはハードルが高くなってしまいます。しかし、マイボトルを持参することで、環境に良いだけではなく、ペットボトル飲料を買わなくて良いため、節約にもなるのです。SDGs に貢献でき、自分にもメリットがある。少しでも多くの方が、マイボトルを持っていこう、と意識する日が増えていけば幸いです。

おわりに

“誰もがきちんとした場所で暮らせる世界を”

住まいの問題だけではなく、目を凝らしてみると、身近なところにも様々な課題があるはずです。ボランティアはしてあげるのではなく、自分たちの方が学びが多いということ。自分たちに何ができるのか考えながら、そんな経験を重ねていけるよう、これからも活動を続けていきます。

参照

ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパン 「ハビタットとは」
https://habitatjp.org/aboutus （参照 2023 年 11 月 2 日）